

東海地方の歴史災害を視覚資料化する試み

An experiment in a visualization of historical disasters at Tokai area

林 能成[1]; 木村 玲欧[1]

Yoshinari Hayashi[1]; Reo Kimura[1]

[1] 名大・災害対策室

[1] Disaster Management Office, Nagoya Univ.

<http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/~taisaku/>

名古屋大学災害対策室では、地域と学内の防災力向上のための活動を行っている。活動は防災に関するセミナーの開催や、災害関係の文献・地域の防災計画資料を収集公開するアーカイブの整備など多岐にわたっているが、最も重要な活動のひとつとして地域の過去の災害資料を収集・保存・公開する活動があげられる。

名古屋を含む東海地方は歴史的にみても自然災害の多い地方として知られている。地震災害を例に取り上げると、1891年濃尾地震、1944年東南海地震、1945年三河地震など死者1000人を越す日本の地震災害史上でも顕著な地震が、近代に入っても繰り返し発生している。また風水害についても、1959年伊勢湾台風や2000年東海豪雨など、多くの被害が知られている。災害対策の第一歩は自然災害を「自分の問題」と認識してもらうことであり、自分が住む地域の過去におこった災害を知ることが防災意識向上の上で大変効果が大いと考えられる。

しかし1940年代およびそれ以前に発生した災害では、写真などの映像資料がほとんど残っておらず、その災害の実態や当時の人々の行動などを本来持つインパクトをもって伝えることが大変困難である。例えば三河地震はM7クラスの内陸地震で死者2300人あまりを出した大災害であったが、戦時中に発生したために写真がほとんど撮られていない。更に被災地周辺が震災直後に戦災にあったこともあり記録資料もほとんど残っていない。そのために被災の実態が地域の人々に必ずしもうまく伝えられてこなかった。

我々は今回、三河地震の被災写真を今も保存している方に会い、写真をお借りするとともに、当時の被災状況やその後の行動についてのインタビューを行った。この写真自体は地元の新聞などにも取り上げられたもので、名古屋地区では広く知られているものであるが、報道でとりあげられるものは被害写真としてインパクトがあるものに限られ、その写真が撮られた背景や当時の集落の様子などは十分伝えられてこなかった。そこで、この写真を中心にそえながら、被災時の様子やその後の復興活動の様子などをインタビュー手法をもとに明文化し、写真には映りこんでいない災害過程を補った。さらに被災状況の空間的な広がりを各種地図でとらえて可視化することを試みた。具体的には写真を挿入したインタビュー概要を作成し、あわせて既存の文献や最新の研究成果も踏まえた被災マップのパネルを製作した。これにより、M7クラスの地震による被災範囲が、兵庫県南部地震と同様に非常に局在化しており、被害は断層に非常に近いところに集中していることなどが明瞭になった。こういった事柄は地震学的にはある意味常識であり、これまでも指摘されてきたことであるが、具体的な地名が入った地図として被災状況が表現され、あわせて本物の被災写真を展示できることで、これまでにない迫力で当時の様子を伝えることができたと考えている。

しかしこれら被害地震を更にインパクトをもって伝えるためには、現状の静止画的表現だけでは力不足である。そのためには人と防災未来センターにおける兵庫県南部地震の再現CGのような動画的表現が強力であろう。今後、今回の写真に加え、さらに聞き取り調査の事例や当時の世相がわかる映像資料を増やして、再現動画作成のための準備をすすめていきたい。また東南海地震など他の地震についての調査も進めていく予定である。

謝辞：愛知県碧南市の原田三郎さんには長時間のインタビューをお願いするとともに、貴重な写真の使用許可もいただきました。記して感謝いたします。